



## 阪大病院フォーラム「在宅医療、療養施設における感染対策」開催

感染制御部

1月18日、銀杏会館にて阪大病院フォーラム「在宅医療、療養施設における感染対策」が開催され、医師19名、看護師127名、その他医療系25名、事務職員13名、合計184名の方に参加して頂きました。今回は、この内容についてご紹介します。病棟における感染対策、患者さんの退院時指導や施設などから転院されてきた患者さんがどのような感染対策を受けてこられたかを理解するのに役立てていただければと思います。

### 施設や在宅医療における感染対策の違い

感染制御部 看護師長  
感染管理認定看護師 鍋谷佳子

施設、病院といっても、その中には様々な種類があり、それぞれの施設で感染対策は異なります。感染対策とは、感染経路を遮断することによって感染のリスクを減らすことであり、リスク因子は病院や施設によって異なるからです。リスク因子とは、当院のような急性期病院では免疫機能低下患者・侵襲処置・医療器具の使用・抗菌薬の投与・職員の密な接触が挙げられますが、長期療養施設では高齢者（寝たきり）・認知症による衛生行動の不徹底、在宅医療ではケア提供者の手指や汚染した器材の使用などが挙げられます。もちろんこれらのリスクから考えられる感染症も、急性期病院では手術部位感染・肺炎・敗血症・多剤耐性菌感染症であるのに対し、長期療養型施設では疥癬・嘔吐下痢症・インフルエンザ・結核というように異なります。このため効果的な感染対策を行うには、自施設のリスクを評価し、それに応じた感染対策を考える必要があります。しかし、どこにおいても、標準予防策と感染経路対策が基本であり、これをしっかり守ることが重要です。

例えば、在宅医療では、標準予防策と、使用した器材の処理を適切に行うことが重要です。器材は在宅で行う高度な医療ケアに用いるものと日常ケアに用いるものを分けて考え、洗浄 乾燥のみ



か、洗浄 消毒 乾燥とするか、ディスポにするかを決めます。他の患者とのクロスがないので、経管栄養のチューブや吸引チューブなどは、在宅では再使用できます。また、設備が整っていないため、手洗い・清潔操作・器具の消毒などのやり方を具体的に指示することも大切です。

### 在宅医療・療養施設における感染対策

医療法人永広会事務局 感染安全管理担当  
感染管理認定看護師 森下幸子

高齢化が進み、様々な病態の患者さんが増えたため、平成13年の法改正により一般病床と療養病床に分けられました。療養病床とは長期にわた

って療養を必要とする患者さんが入院する病床であり、リハビリや医療保険の必要度が高ければ医療保険、介護が中心であれば介護保険中心の入院を行います。このような療養施設では回復期・維持期・終末期のケアを行い、急性期は他の病院で診ます。

感染対策の中心は標準予防策です。一番重要なのはもちろん手指衛生です。認知症の患者さんや手すりが必要とする患者さんが多く手指消毒剤を壁に設置する事は危険なため、職員は携帯用の手指消毒剤をポケットに入れてあります。また、手洗いポスター・石鹸・ペーパータオルなどを設置し環境を整え、更にトレーニングを行います。そして、トレーニングが行動に反映されているか消毒剤の使用量をモニタリングして啓発しています。

患者隔離については、転倒・転落リスクの増加や認知症が悪化したりするため、個室隔離は行いません。この季節問題となるのが急激に発症するインフルエンザです。通所（高齢者版の保育園）の場合は、熱があればお休みしてもらいます。風邪症状の人の面会禁止のポスターを貼り、職員は風邪をひいたら休むことを徹底させます。また、施設内で発症が疑われる患者さんは、車椅子を他の人から離したり食事をするテーブルを分けるなど、ユニット隔離をして観察します。子供の訪問は流行の引き金となることがあるため、お正月など子供と一緒に過ごす時はなるべく外泊してもらいます。



ノロウイルス対策としては、オムツ交換専用カートというものがあるのですが、これに工夫をして、不潔なものをさわったあとに直接清潔な物に触れないよう仕切りを作り、間に手洗いを挟むよう動線と物の配置を工夫しています。カートにはウェットティッシュを載せ、一人の排泄介助が終わるたびに周囲を拭いて物品が汚染されないようにしています。

ゴミの問題があるので、耐熱のものは熱水処理乾燥、耐熱でないものは洗浄 消毒 乾燥させて、再使用しています。乾燥できないものは安く捨てられるものに置き換えます。

医療サービスが多種多様になり、施設に来る患者は、通所サービスや訪問看護など別のサービスを受けていることが多くなっています。施設内だけの感染対策では持ち込みの感染が途絶えないため、保健所主催の地域施設を対象とした感染管理についての講習会のお手伝いもしています。このように地域単位で感染対策を行っていくことも重要と考えています。

今回は当院とは異なる環境での感染対策のお話でした。これを参考に患者さんが退院・転院される環境に応じた感染対策を指導して頂ければと思います。

